

## 縄文時代における野生地下茎食糧化の地域性と季節性

山 本 直 人

### はじめに

縄文時代の野生植物の食糧化において、生産性と保存性の面からとくに重要であると考えられるのは堅果類と地下茎で、これらが縄文時代の主要食糧になっていたと考えられる。そのうち植物遺体が検出される堅果類についてはかなり研究がすすめられてきている。それに対して野生地下茎が検出された例はごくわずかで、それも炭化した球根類が数遺跡で確認されているにとどまり、クズやワラビなどの根茎が検出されたことはいまだに知られていない。このように植物遺体の出土例が皆無にひとしく、確証がえられていない状況のもとでは実証的な研究は困難であり、実証的な研究を重視する日本考古学においては、研究資料の少ない野生地下茎食糧化の問題はあまりとりあげられず、ほとんど研究がすすめられていない状況である。

その一方では、縄文時代においてもクズ・ワラビ・カタクリ・テンナンショウ・キカラスウリ・ユリなどの地下茎が食糧化されたことが推測されており<sup>(1)</sup>、そうした推測を積極的に支持する佐々木高明氏のような民族学者も存在する<sup>(2)</sup>。このように推測される根拠は三つあると考えられる。第一に、野生地下茎を食糧化したという近過去および現在における日常の生活体験や民俗学的な知識である。第二に、土掘り具という機能が一般にみとめられている打製石斧の存在である。第三に、縄文時代における野生植物食用化の技術的なレベルの高さである。すなわち、考古学の研究者が意識的であろうとなかろうと、日常の生活体験や民俗学的な知識をもとにモデルをつかい、打製石斧の具体的な用途の一つとして野生地下茎の採取を想定し、打製石斧の存在の解釈をこころみているということである。さらには、縄文時代の植物食の研究において、トチノキやナラ類のような堅果類から水さらしや加熱処理をしてデンプンを抽出していたことがあきらかにされており、堅果類食用化の技術的なレベルから判断して、地下茎からもデンプンがとられていたと考えてもさしつかえないであろうということである。

このような推測がおこなわれているなか、本稿も縄文時代においても野生の地下茎が食糧化されていたという前提に立脚し、この条件のもとで論をすすめていく。そして本稿の目的は二つあり、その一つは縄文時代における野生地下茎食糧化の地域性と季節性に関する作業仮説を提示することである。もう一つは堅果類にかたよりのある縄文時代の植物食の研究を是正するための一助とすることである<sup>(3)</sup>。

つぎに方法についてのべることにする。野生地下茎食糧化の地域性を直接あらかず資料は採取

対象植物と採取用具および両者の相互関係であると考えられることから、それらに相当する縄文時代の考古資料と民俗学・民具学の研究からえられたモデルを比較・検討するというものである。まず、民俗学・民具学の研究からえられた採取対象植物と採取用具およびその関係をあらわすモデルを確認する。つぎに、野生地下茎食糧化に関連する縄文時代の植物遺体・採取用具に関して、基本的な事実と研究の現状を確認する。そして両者を比較・検討しながら、採取対象植物と採取用具の対応関係を明確にし、つづいてそれらの空間的分布をあきらかにする。それが縄文時代における野生地下茎食糧化の地域性をあらわすものとなる。さらに民俗学・民具学の研究にもつづいて、それら季節性について言及する。

縄文時代に食糧化されたと想定される野生地下茎は17種類である。みおとしているものもあり、これらのほかにも想定されている種類もあると考えられるが、とりあえずはこの17種類をとりあげておくものである。それらは地下茎の形状から塊茎類・根茎類・鱗茎類の3類にわけられる。すなわち、塊茎類はカラスウリ・キカラスウリ<sup>(4)</sup>の2種類、根茎類はクズ・ヤマノイモ・トコロ・ヒメドコロ・ワラビの5種類である。鱗茎類はヒガンバナ・キツネノカミソリ・カタクリ・ノビル・ウバユリ・オオウバユリ・オニユリ・コオニユリ・ヤマユリ・テンナンショウの10種類である。さらにこれらは食糧化の方法を基準に2類に分けることができ、食糧化の問題にとってはこちらの分類基準の方が重要である。その一つはそのまま食用とするもので、ヤマノイモ・ヤマユリが該当する。もう一つはアク・有毒成分や繊維をとりのぞいてデンプンを抽出するもので、クズ・ワラビ・カタクリ・オオウバユリ・ウバユリ・キカラスウリなどがある。デンプンを抽出する地下茎はいずれもそのままの状態では長期保存にたえるものではないが、デンプンをとりだすことによって長期間の保存が可能になり、余剰分を貯蔵することができる長所がある。

## 1. 民俗モデルの構築

さきにものべたように、野生地下茎の植物遺体の出土例が皆無にひとしく、確証がえられていない状況のもとでは実証的な研究は困難であり、この点を打開するためには考古学的な目的意識をもった民俗調査が必要で、それをこれまで実践してきた<sup>(5)</sup>。そして民俗学における先行研究やわたしの事例研究の成果により、えられたモデルを比較の対象にしていくものである。

### (a) 採取対象地下茎の地域性

最初に、地下茎それぞれについて食糧化された伝承や現在でも食糧化されている地域の分布範囲をあきらかにしておく。

クズは岩手県にも一部存在するものの、太平洋側では東京都葛飾区、内陸部では岐阜県飛騨地方、日本海側では新潟県村上市であり<sup>(6)</sup>、大局的には照葉樹林帯の分布とよく一致している<sup>(7)</sup>。

ワラビは沖縄県をのぞいてほぼ全国的に分布するが、北海道と東北地方南部から中部地方にかけては稀薄である<sup>(8)</sup>。ワラビ根の採取は中部地方から東北地方にかけての落葉広葉樹林帯でもみられるが、現在や近過去の牧草地で採取されている例から判断して、これらの地域の採取はウシ

やウマの放牧と関係が深く、古墳時代以後の牧<sup>(9)</sup>の発達とともに漸次分布域を拡大していったものと推定される。それで本来照葉樹林帯の植物とされるワラビは、これらの地域においては縄文時代には採取されなかったものと考えられる。

カタクリは明治年間では東北地方に産出量が多かったという<sup>(10)</sup>。

オオウバユリがアイヌの人のびにととって重要な食糧であったという<sup>(11)</sup>。オオウバユリはウバユリになるが、寒冷地に適しているという<sup>(12)</sup>。

ヤマノイモについては、調査事例が少なく一般化できないが、現状での生態的分布範囲は本州・四国・九州である<sup>(13)</sup>。

これまでのべてきたことをもとにすると、以下にしるす地下茎がそれぞれの地域で主要な採取対象植物になっていたものと推測される。北海道ではオオウバユリ・カタクリ、東北地方ではオオウバユリ・ウバユリ・カタクリ・ヤマノイモ、関東地方から中部地方にかけてはクズ・ワラビ・カタクリ・ヤマノイモである。近畿地方から九州地方にかけてはクズ・ワラビ・ヤマノイモである。

#### (b) 採取対象地下茎と採取用具の関係

クズの採取用具には、鍬(第1図1・2)や鋤・掘り棒(第1図3・4)がある<sup>(14)</sup>。

ワラビの採取用具も、鍬(第2図, 第3図1・4)や鋤(第3図2・3・5)である<sup>(15)</sup>。

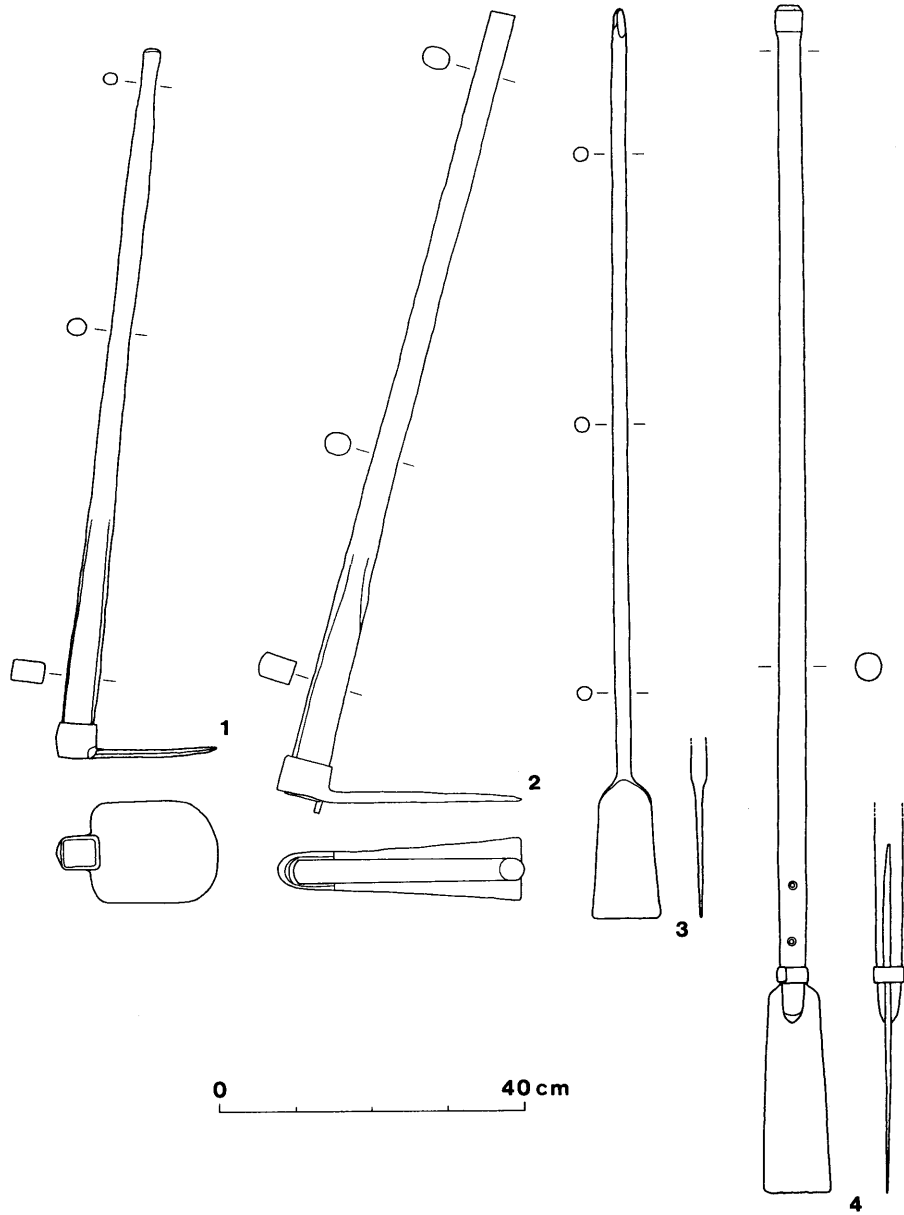
ヤマノイモの採取用具には、鍬(第4図1), 掘り棒(第4図2~4), 鋤・掘り棒(第4図5・6)がある<sup>(16)</sup>。

アイヌ民族のあいだでは、オオウバユリの根を「トゥレプタニと呼ぶ長さ60~80センチほどの先端を削った棒を使って掘った」<sup>(17)</sup>ことが指摘されており、第5図1~3のトゥレプタウライニも長さ90cmあまりの木製品である<sup>(18)</sup>。またオオウバユリを湿地で採取しているようすがえがかれた絵画資料<sup>(19)</sup>が存在することや、オオウバユリと同じ種類のウバユリが「谷あいのやや湿ったところに群生するため、比較的採集しやすい」<sup>(20)</sup>ことから判断して、オオウバユリやウバユリは木製掘り棒で採取されていたと推測される。そして木製掘り棒は泥が付着して重くなる湿地において効果的に機能したものと考えられる。

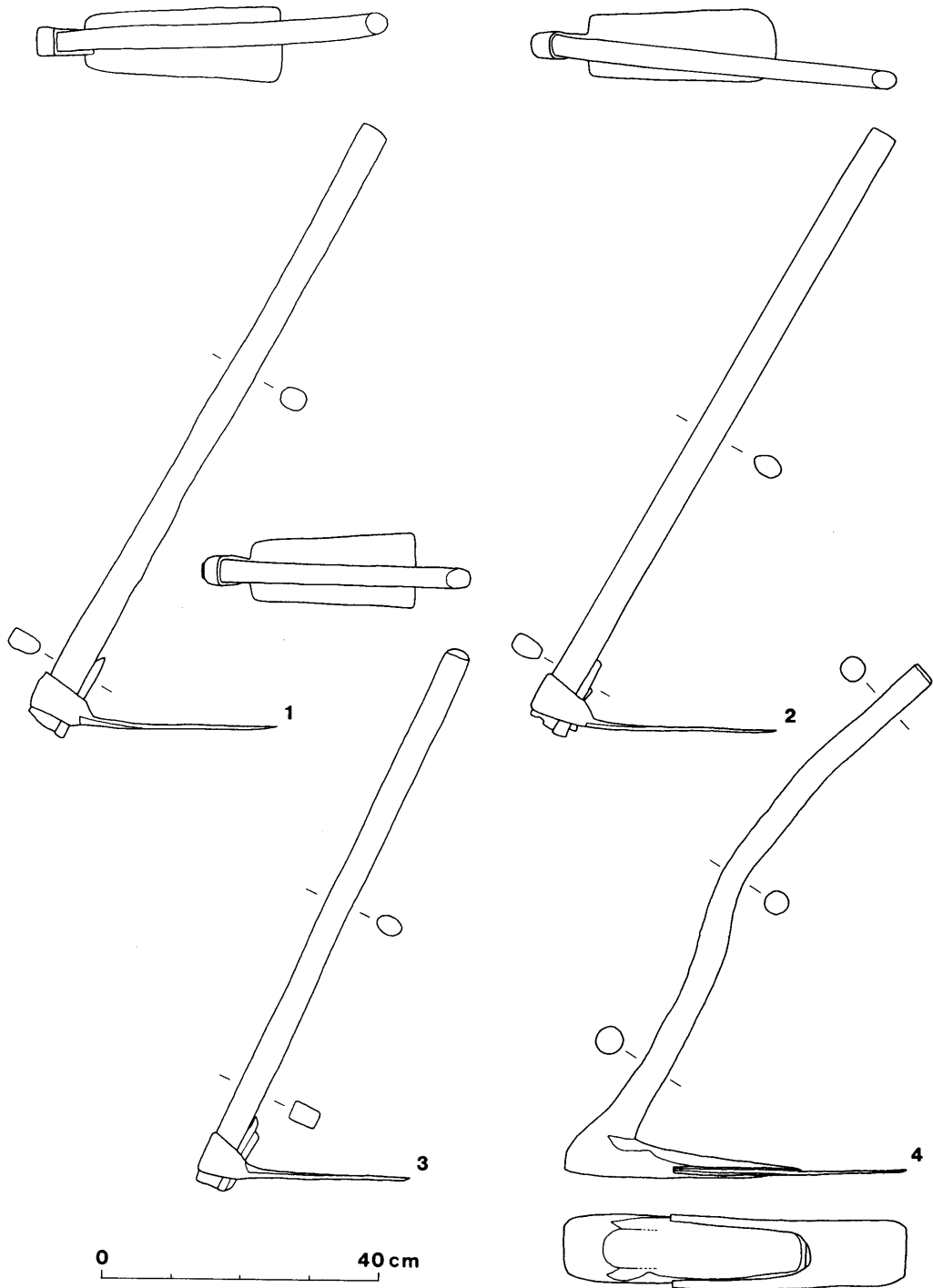
さらにアイヌ民族のあいだで、鹿角製土掘具が手鍬として使用されていたことが知られている<sup>(21)</sup>。手鍬はシットアップとよばれ、木製のもの(第6図1・2・4)と鹿角製のもの(第6図3)があり<sup>(22)</sup>、旭川市周辺ではギョウジャニンニクを採取していたことが報告されている<sup>(23)</sup>。このほかに大型の木製鍬が存在していたことが知られている<sup>(24)</sup>。

## 2. 縄文時代の遺物の検討

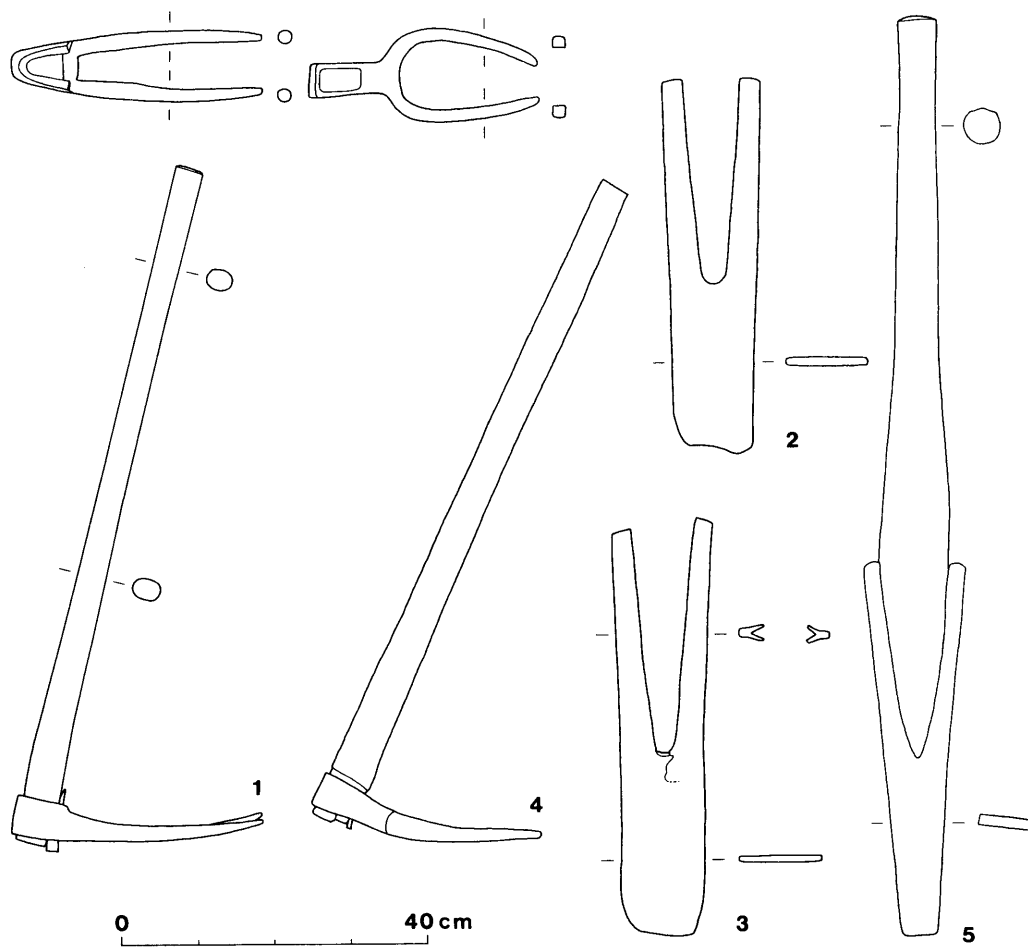
採取対象植物となる縄文時代の考古資料には植物遺体があり、採取用具の相当する遺物には木製掘り棒・鹿角製掘具・打製石斧がある。植物遺体についてはその種類と時空的分布を、木製掘り棒・鹿角製掘具・打製石斧の3種類の採取用具についてはそれぞれの時空的分布を明確にし、



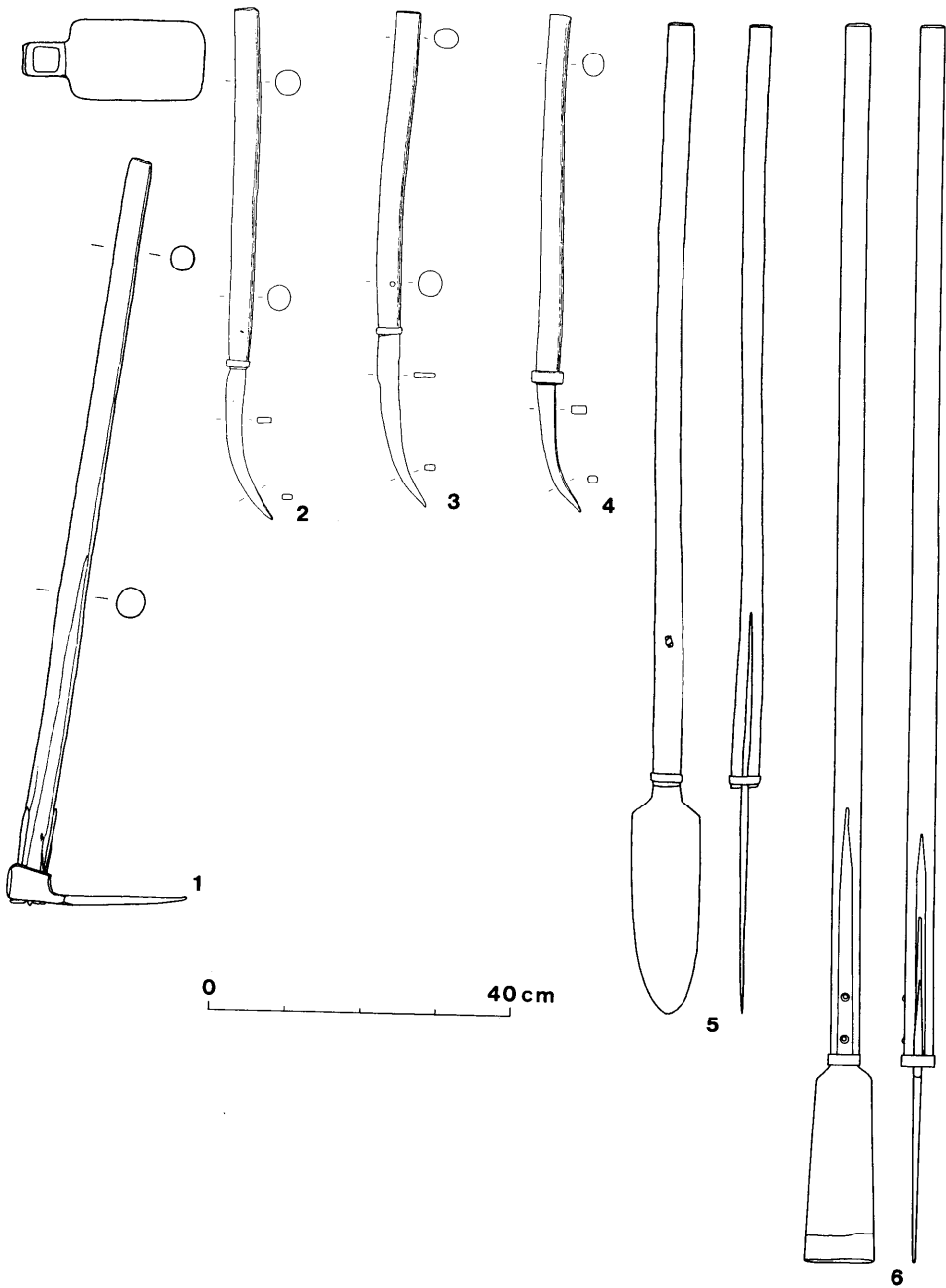
第1図 クズ採取用具実測図(縮尺1:10)



第2図 ワラビ採取用具実測図1 (縮尺1:10)



第3図 ワラビ採取用具実測図2 (縮尺1:10)



第4図 ヤマノイモ採取用具実測図(縮尺1:10)

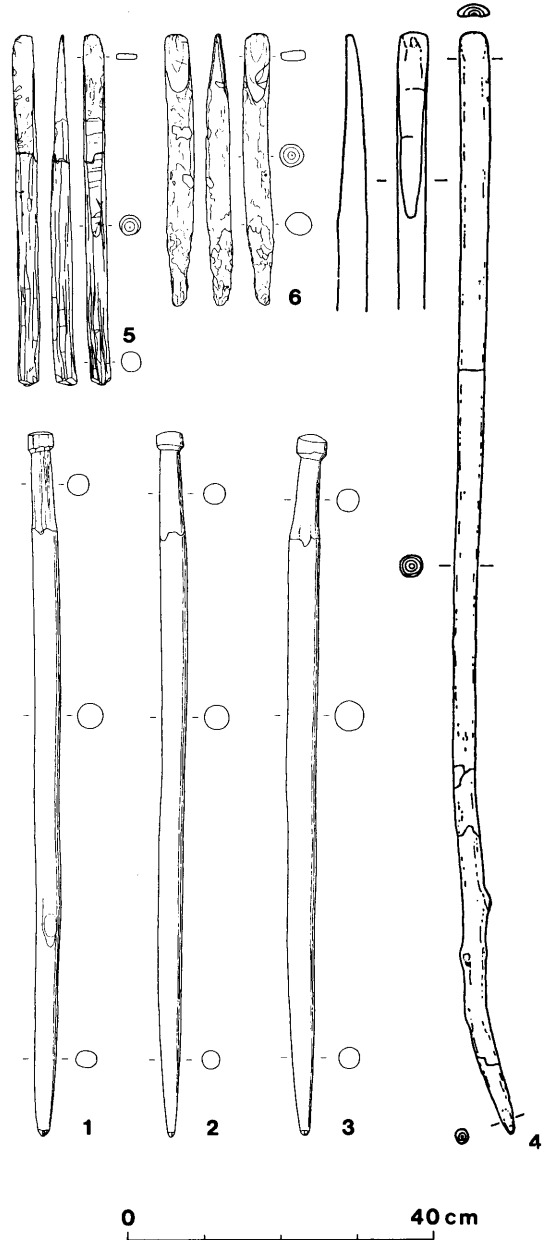
時代は異なるが、鉤形木鍬も資料にくわえて検討する。そして民俗事例や民具資料との対比から、採取対象地下茎を類推する。

#### (a) 植物遺体

植物遺体としては炭化した球根類が出土しているにとどまり、長沢宏昌氏によって集成がおこなわれている<sup>(25)</sup>。それによると、炭化球根類の出土遺跡は5県9遺跡をかぞえ、神奈川県1遺跡、福井県1遺跡、山梨県5遺跡、長野県1遺跡、岐阜県1遺跡となっており、地域的には列島の中央部での出土例が多いことがうかがわれる。

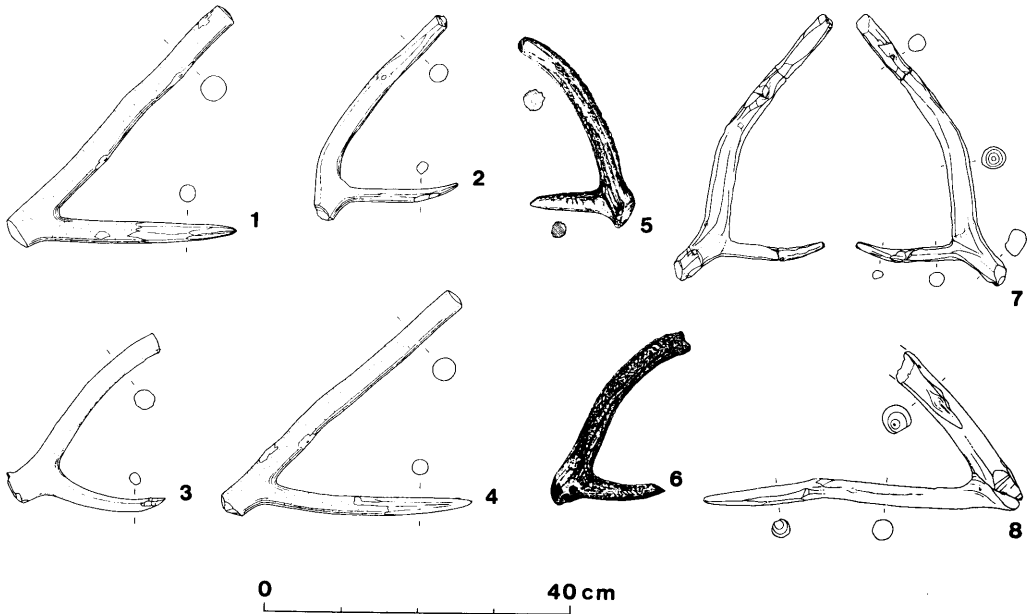
山梨県内の5遺跡の資料はいずれも長沢宏昌氏が検出ないしは確認したものであるが、それらを順にみていくことにする。北巨摩郡白州町上北田遺跡から前期前半の炭化球根が検出されている<sup>(26)</sup>。西八代郡三珠町水呑場北遺跡からは中期中葉井戸尻式期の炭化球根が検出され<sup>(27)</sup>、東八代郡御坂町・八代町の花鳥山遺跡からは前期後半諸磯b～c式の炭化球根が検出され<sup>(28)</sup>、これらは松谷暁子によって種類の同定がおこなわれ、ノビル・アサツキの可能性が有力と報告されている<sup>(29)</sup>。東山梨郡勝沼町釈迦堂遺跡三口神平地区の128号土坑からも出土しており<sup>(30)</sup>、松谷暁子がギョウジャンニクに類似すると報告している<sup>(31)</sup>。塩山市獅子之前遺跡では3棟の住居址から出土し、所属時期は諸磯a～b式である<sup>(32)</sup>。これらについても、松谷暁子がユリ科のネギ属と報告している<sup>(33)</sup>。

つづいて山梨県以外の出土例をみていくと、神奈川県平塚市上ノ入遺跡では中期後半加曾利E式期のF住居址からキツネノカミソリが出土したことが報告されている<sup>(34)</sup>。福井県三



第5図 木製掘り棒実測図  
(4 桜町遺跡, 5・6 美々8遺跡低湿部,  
4～6は各報告書からの引用, 縮尺1:10)





第6図 鉤形木鍬・鉤形鹿角鍬実測図

(5・6 蛭塚遺跡, 7・8 美々8遺跡低湿部, 5~8は各報告書からの引用, 縮尺1:10)

方郡三方町鳥浜貝塚では前期前葉羽島下層Ⅱ式~北白川下層Ⅱ式並行の炭化したユリ科の球根が検出されている<sup>(35)</sup>。長野県判ノ木山西遺跡7号住居址から出土した土器の内面に付着したオコゲは、球根類であるとされている<sup>(36)</sup>。岐阜県益田郡下呂町ミネチゴ遺跡のパン状炭化物と報告されてきた資料は炭化球根の集合体であり<sup>(37)</sup>、諸磯a~c式や北白川下層Ⅱ~Ⅲ式・大歳山式が出土していることから前期に属するものであると考えられる<sup>(38)</sup>。

時期的分布と球根の種類を整理しなおすと、時期的には前期から中期に集中しており、概して前期に多い傾向がみられる。球根の種類については、松谷暁子が同定を実施しているものの、炭化した状態のため同定がなかなか困難で、断定するにはいたっておらず、ユリ科ネギ属やギョウジャニンニク・ノビル・アサツキにになると報告されているのにとどまっている。

#### (b) 木製掘り棒

縄文時代の木製掘り棒は2遺跡から出土したことが知られているのみである。青森県青森市三内丸山遺跡<sup>(39)</sup>から前期の掘り棒が、富山県小矢部市桜町遺跡<sup>(40)</sup>からは中期後葉の掘り棒(第5図4)が出土している。ただ、鳥浜貝塚から出土している「削り出し棒、尖棒」と報告されている木製品<sup>(41)</sup>のなかには、掘り棒になる可能性のあるものも存在する。また時期はくだるが、北海道千歳市美々8遺跡低湿部<sup>(42)</sup>からアイヌ文化期の土掘り棒が3点出土している(第5図5・6)。

桜町遺跡の掘り棒は旧河川跡から出土し、この掘り棒は長さ1.5mの細長い棒材で、その一端はとがり、もう一端はヘラ状になっている。第5図にしめすように、形態・大きさともに尖端部

はトゥレプタウライニに類似し、ヘラ状端部は美々8遺跡低湿部の土掘棒に酷似する。三内丸山遺跡の掘り棒も一端はとがり、反対側はヘラ状になっている<sup>(43)</sup>。

トゥレプタウライニの採取対象地下茎を根拠に判断すると、これらはオオウバユリやウバユリの採取につかわれたものと考えられる。

### (c) 鹿角製掘具

金子浩昌・忍沢成視の両氏によって鹿角製製品の全国的な集成がおこなわれ、鹿角製の掘具も集成されている<sup>(44)</sup>。このなかで鹿角製の掘具は「Y」字状を呈する掘具Ⅰと「レ」の字状の鉤形を呈する掘具Ⅱに分類されている。前者はアイヌ民族のシッタープとは形態的に異なり、「鹿角製斧状製品」と呼称され、アワビなどの採取具である可能性が高いことから<sup>(45)</sup>、ここではシッタープと形態が同一の掘具Ⅱのみをとりあげるものである。

集成の結果によれば、17・18遺跡75～77点<sup>(46)</sup>出土しており、関東・東海・西日本に分布し、期的には早期から晩期まで存在するようであるが、「後期中葉から末葉のかぎられた時期に、蜆塚・西貝塚などの周辺地域に盛行した」とされている<sup>(47)</sup>。第6図5<sup>(48)</sup>・6<sup>(49)</sup>は静岡県浜松市蜆塚遺跡から出土したものである。

シッタープの採取植物から考えて、ギョウジャニンニクのような球根が地中の浅いところにある小型球根類の採取につかわれたと推測される。

### (d) 打製石斧

打製石斧の時空的分布についてはすでにまとめたものがあり、それを援用する<sup>(50)</sup>。土掘り具としての打製石斧は前期前半関山式期に西関東において出現し<sup>(51)</sup>、前期中葉黒浜式期に増加しはじめ、前期ではおもに関東地方から長野県南部にかけて分布する。中期前葉新保式期には中部地方の北陸まで波及し、東海でも中期になってひろがっている。さらに後期中葉には近畿地方、後期後葉から晩期にかけて九州地方におよんでいる<sup>(52)</sup>。東北地方への波及は弱く、出土遺跡が少ないうえに出土量もかなり少ない。すなわち関東地方を起点として東から西へと大きくながれており、北への拡張は緩慢である。量的には、中期中葉の勝坂式期・井戸尻式期からふえはじめ、加曾利E式期・曾利式に関東地方から長野県南部において爆発的に増加する。北陸でも中期後葉の串田新式期に増加し、東海の山間部でも中期後半に増加する傾向がみられる。後期から晩期にかけては、手取川扇状地のように、狭小な地域において大量の打製石斧が出土するといった具合で、局地的かつ分散的である。

このような事実に対して、渡辺誠氏は「トチなどの濃密な分布域から遠ざかる地域で、この不足を補うように地下茎・球根類に比重がかかり、その掘り棒の刃先として打製石斧の必要度が高まったとみることもでき」と解釈している<sup>(53)</sup>。

打製石斧の主要な採取対象植物は、クズとワラビであったと推定される。このように推定する理由は、第一に縄文早期末から前期前半にかけての温暖化にともなって房総半島に避寒していた照葉樹林が関東平野に拡大していき、縄文海進の頂点である関山式にはもっとも拡大したという

ことがある<sup>(54)</sup>。照葉樹林帯の植物とされているクズやワラビ<sup>(55)</sup>もその拡大ともひろがっていったと考えられるからである。第二の理由は第一の理由とも関連してくるが、採取用具としての打製石斧の出現が関山式にもとめられるからである。第三には、民俗事例ではクズ根を株から切りはなすときに鋸をつかっており、そうしないとなかなか切れない地下茎である。打製石斧の刃先は磨製石斧ほどではないにしろ伐採具的な機能をもちあわせており、しかも刃こぼれをおこしても影響がない程度のほどよい粗雑さである。このような特徴をそなえた打製石斧は、鋤先あるいは鋤先として土中でクズやワラビの根茎の採取にあたっては、効果的にその役割をはたしたと考えられるからである。

#### (e) 鉤形木鋤

最初に、このような木の股を利用した「レ」の字状を呈する木製の鋤を、北海道千歳市美々8遺跡低湿部の出土例<sup>(56)</sup>にならって「鉤形木鋤」としておきたい(第6図7・8)。これにしたがえば、鹿角製斧状製品や鹿角製の掘具Ⅱも「鉤形鹿角鋤」と仮称した方がよいのかもしれない。

これまで縄文時代の遺跡から実際に遺物は出土していないが、縄文時代においてそれが存在したことを想定しておきたい。しかも小型の手鋤と大型の鋤の両者が存在したものと想定しておきたい。その第一の理由は、考古資料としての鹿角製土掘り具の存在である。アイヌ民族においては鹿角製と木製の両者が存在し、それらは考古資料の鹿角土掘り具と同一の形態で、木製品は材質が異なるだけである。第二の理由は、石斧柄と製作技術が同一である点による。アイヌの「レ」の字状木製品は幹から枝わかれする部分を利用し、簡単に製作されている。一方、福井県三方町鳥浜貝塚や富山県小矢部市桜町遺跡から木の股を利用した磨製石斧の木柄が出土しており<sup>(57)</sup>、両者をくらべたら、製作技術がおなじであることがわかる。縄文時代にも存在していたが、木製品のため腐朽してなかなか検出されないと理解しておきたい。

採取対象植物としては、小型の鉤形木鋤ではギョウジャニンニクが類推される。大型の鉤形木鋤については、さらに飛躍することになるが、地面から20~30cmのやや深い地中にあるカタクリを想定しておきたい。

### 3. 野生地下茎食糧化の地域性

縄文時代の考古資料と民俗学・民具学の研究から構築されたモデルをもとに、採取対象植物と採取用具および両者の関係を比較・検討したところ、以下のような野生地下茎食糧化の地域性を作業仮説として提示することができる。

北海道から東北地方にかけては木製掘り棒でオオウバユリ・ウバユリ、大型の鉤形木鋤でカタクリ、そして小型の鉤形木鋤や鉤形鹿角鋤でギョウジャニンニクを採取したものと推測される。関東地方から中部地方にかけては打製石斧でクズ・ワラビ・カタクリ・ヤマノイモ、木製掘り棒でウバユリ、小型の鉤形木鋤や鉤形鹿角鋤でギョウジャニンニクやキツネノカミソリを採取していたと考えられる。近畿地方から九州地方にかけては打製石斧でクズ・ワラビ・ヤマノイモを採取し

ていたと考えられる。北海道や東北地方に縄文時代前期から晩期にかけて、遺跡数が多いうえにその規模も大きく、その経済基盤をささえる植物食においては、堅果類だけでなく、地下茎も大きな比重をしめていたものと考えられる。それにもかかわらず、打製石斧の量が少ない理由は、このような採取用具と採取対象地下茎の地域性にもとづくものと推測される。

野生地下茎食糧化に関連する考古資料の検討のところで記述してきたように、炭化球根類の検出が前期前半まで遡及すること、三内丸山遺跡の掘り棒が前期に属すること、土掘り具としての打製石斧が前期関山式期に出現し、時期をおいながら漸次分布範囲を拡大していることがある。これらのことから考えて、上記に提示した野生地下茎食糧化の地域性は、少なくとも縄文前期までさかのぼるものと考えられる。

第1表 野生地下茎採取・加工の時期

種類 \ 月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
カラスウリ					■	■	■	■	■	■		
キカラスウリ						■	■	■	■	■		
クズ							■	■	■	■	■	■
ヤマノイモ						■	■	■	■			
ワラビ	■	■			■	■	■	■	■	■		
ヒガンバナ	■	■	■	■	■							
カタクリ			■									
オオウバユリ	■	■	■	■	■	■	■	■	■			
ウバユリ			■									
テンナンショウ	■											

#### 4. 野生地下茎食糧化の季節性

縄文時代における野生地下茎食糧化の季節性をあらわす資料は、いまのところ存在していない。それで現状では民俗調査からえられた成果をもとに採取・加工の時期を整理し、それをもって季節性をあらわすものとするしかないと考えている。

この問題については、すでに橋口尚武氏により言及され、季節性をあらわす表が提示されている<sup>(58)</sup>。わたしの場合も、橋口尚武氏の研究に先学の民俗調査や自分自身の事例研究<sup>(59)</sup>をくわえ、自分なりの採取・加工の時期をあらわす表を作製するものである(第1表)。この表は、自然環境が現在とほぼおなじになったと考えられる縄文前期<sup>(60)</sup>までは援用しうるものと考えられる。ただ南北に長い日本列島であるから、地域によって採取・加工の時期に若干の差違がみられることも考慮しなければならないであろう。

## おわりに

植物遺体がほとんど検出されておらず、確証がないために、縄文時代においても野生地下茎が採取され、食糧化されたという前提条件のもとで論をすすめてきた。また実証的な研究が困難であるため、民俗学・民具学の研究成果をもとに構築したモデルと縄文時代の考古資料を比較・検討し、鉤形木鍬のように実際には出土していない採取用具が存在したと想定し、縄文時代における野生地下茎食糧化の地域性と季節性を推測してきた。そのため前提条件がなりたないことが判明すれば、当然のことながらこの論は成立しなくなるし、鉤形木鍬の想定することが無理となれば、論の修正を余儀なくされる。前提条件のうえにいくつもの想定と推測をかさねるという作業をつづけてきているため、前提条件がこければ根底から崩壊するし、どこかの段階で一つこければ、それ以後の推測が瓦解する危険性もふくんでいる。もっともこうした点については、そうなったときに対応すればよいであろうと考えている。

## 注

- (1) 渡辺 誠, 1975, 『縄文時代の植物食』, 168頁, 雄山閣出版・東京。  
渡辺 誠, 1983, 『縄文時代の知識』, 113頁, 東京美術・東京。
- (2) 佐々木高明, 1986, 『縄文文化と日本人』, 74～84頁, 小学館・東京。  
佐々木高明, 1991, 『日本史誕生』, 142～148頁, 集英社・東京。
- (3) 堅果類と地下茎において研究の優先順位をくらべた場合、植物遺体が遺存していて民俗事例も残存している堅果類の方が優先順位は上位にくる。そして植物遺体がほとんど遺存していない地下茎食糧化の研究も、それをうけた形ですすまざるをえない。堅果類食糧化に関する研究は渡辺誠氏によって大きくすすめられ、その研究の進展にもなって植物食のあらたな課題がうかびあがってきた。そうした課題の解決を前進させてこなかったということがあり、その結果として、縄文時代の植物食研究は堅果類にかたよったままになっていると考えられる。
- (4) 下記文献で青森県三内丸山遺跡からキカラスウリの種子が検出されていることが報告されている。客観的自然環境と主体的自然環境は異なり、その検出により客観的自然環境の一部があきらかになったということである。キカラスウリが当時存在していたことと塊茎からデンプンをとりだしたことは別問題であり、出土したのが種子であることとその出土状況からでは、それが集落付近にはえていたことをしめすにとどまり、塊茎からデンプンをとりだしていたとまではいいきれず、あくまでデンプンをとりだしていた可能性が推測されるだけである。今後の資料の増加を期待しておきたい。  
岡田康博・伊藤由美子, 1995, 「円筒土器文化の植物利用」『考古学ジャーナル』389, 20～24頁, ニューサイエンス社・東京。
- (5) 山本直人, 1995 a, 「縄文時代における野生根茎類食糧化の基礎的研究」『名古屋大学文学部研究論集』122 (史学41), 83～130頁, 名古屋。  
山本直人, 1995 b, 「縄文時代におけるクズ食糧化の基礎的研究—宝達葛を中心として—」『石川考古学研究会々誌』第38号, 1～28頁, 金沢。  
山本直人, 1995 c, 「野生根茎類食糧化に関する民俗学・民具学的研究」『助成研究の成果』5, 1～

5頁, 味の素食の文化センター・東京。

山本直人, 1996 a, 「野生根茎類食糧化に関する事例研究—クズとワラビを中心に—」『名古屋大学文学部研究論集』125 (史学42), 41~97頁, 名古屋。

山本直人, 1996 b, 「縄文時代における野生根茎類食糧化の民俗考古学的研究」『石川考古学研究会々誌』第39号, 1~20頁, 金沢。

山本直人, 1997, 「野生地下茎食糧化に関する事例研究」『名古屋大学文学部研究論集』128 (史学43), 19~42頁, 名古屋。

本稿のように食糧化の地域性や季節性について論じることを目的とし, 民俗事例から作製されたモデルを活用し, 考古資料との比較研究をすすめていく場合, 自然環境の同一性と文化系統の連続性ということが前提条件となってくるが, この点については, 1996 b 文献ですでに検討をくわえている。

- (6) 新潟県村上市出身の小田雄三氏 (1947年6月生まれ) のご教示による。子どものころ, クズの根を掘ってきてクズ粉をとったことがあるという。1994 (平成6) 年9月8日におうかがいした話である。
- (7) 注(5) 山本1996 a 文献44・45・49頁。
- (8) 注(5) 山本1996 a 文献51・62~65頁。
- (9) 松井 章, 1991, 「家畜と牧一馬の生産」『古墳時代の研究』第4巻, 105~119頁, 雄山閣出版・東京。
- (10) 市川健夫・斎藤 功, 1985, 『再考 日本の森林文化』, 116~117頁, 日本放送出版協会・東京。
- (11) 荻中美枝, 1985, 「アイヌの食糧採取」『日本民俗文化大系』13, 59~61頁, 小学館・東京。
- (12) 牧野富太郎, 1982, 『原色牧野植物大図鑑』, 742頁, 北隆館・東京。
- (13) 北村二郎・村田 源, 1964, 『原色日本植物図鑑』草本編3, 80頁, 保育社・大阪。  
 牧野富太郎, 1982, 『原色牧野植物大図鑑』, 760頁, 北隆館・東京。  
 牧野富太郎, 1989, 『改訂増補牧野新日本植物図鑑』, 881頁, 北隆館・東京。
- (14) 注(5) 山本1995 a 文献94頁, 1995 b 文献16頁。
- (15) 注(5) 山本1995 a 文献119頁, 1996 a 文献52・54頁。
- (16) 注(5) 山本1997文献24・25頁。
- (17) 注(11) 文献59頁。
- (18) 注(5) 山本1997文献26頁。
- (19) 市立函館図書館, 1968, 『市立函館図書館蔵郷土資料分類目録』第3分冊, 561頁, 函館。
- (20) 松山利夫, 1982, 『木の実』, 155頁, 法政大学出版局・東京。
- (21) 萱野 茂, 1987, 『アイヌの民具』, 200~201頁, すずさわ書店・東京。  
 畠山三郎太, 1968, 「鹿角製土掘具」『考古学ジャーナル』17, 11~13頁, ニューサイエンス社・東京。
- (22) 注(5) 山本1997文献27頁。
- (23) 注(11) 文献。
- (24) 木村 滋編, 1996, 「耕耘」『季刊民族学』76, 62~65頁, 千里文化財団・吹田。
- (25) 長沢宏昌, 1994, 「時代別・食文化を探る 縄文時代」『山梨考古』第49号, 12~22頁, 山梨考古学協会・山梨県石和町。
- (26) 杉本 充・武藤雄六, 1993, 『上北田遺跡』, 白州町教育委員会・山梨県白州町。
- (27) 高野玄明, 1989, 「水呑場北遺跡の調査」『花鳥山遺跡 水呑場北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第45集, 111~125頁, 山梨県教育委員会。
- (28) 長沢宏昌, 1989, 「花鳥山遺跡の調査」『花鳥山遺跡 水呑場北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第45集, 1~108・146~152頁, 山梨県教育委員会。
- (29) 松谷暁子, 1989, 「水呑場北遺跡出土土器付着球根状炭化物の識別について」『花鳥山遺跡水呑場北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第45集, 143~145頁, 山梨県教育委員会。

- (30) 長沢宏昌氏の確認およびご教示による。  
小野正文・山形真理子, 1987, 『釈迦堂遺跡Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集, 山梨県教育委員会。
- (31) 注(29)文献。
- (32) 米田名訓・高野玄明ほか, 1991, 『獅子之前遺跡発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第61集, 山梨県教育委員会。
- (33) 松谷暁子, 1991, 「獅子之前遺跡出土植物遺残について」『獅子之前遺跡発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第61集, 102～103頁, 山梨県教育委員会。
- (34) 小島弘義・浜口哲一, 1977, 「上ノ入遺跡 炭化球根」『どるめん』13, 90～95頁, JICC 出版局・東京。
- (35) 西田正規, 1979, 「植物遺体」『鳥浜貝塚』, 158～161頁・図版100, 福井県教育委員会。
- (36) 百瀬長秀・小林秀夫ほか, 1981, 「判ノ木山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村 その3—』, 8～154頁, 長野県教育委員会。
- (37) 注(25)文献17頁。注(28)文献108頁。
- (38) 大江まさる, 1968, 「岐阜県ミネイチゴ遺跡発掘調査略報」『考古学ジャーナル』27, 15～17頁, ニューサイエンス社・東京。
- (39) 岡田康博, 1995, 「円筒土器文化の巨大集落」『季刊考古学』第50号, 25～30頁, 雄山閣出版・東京。
- (40) 山森伸正, 1990, 「富山県小矢部市桜町遺跡」『日本考古学年報』41, 475～480頁, 日本考古学協会・東京。
- (41) 山田昌久・森川昌和, 1979, 「木製品」『鳥浜貝塚』, 85～142頁, 福井県教育委員会。
- (42) 田口 尚・鈴木 信ほか, 1996, 『三沢川流域の遺跡群XVⅢ』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第102集, 札幌。
- (43) 岡田康博, 1995, 「青森県三内丸山遺跡」『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学別冊6, 10～29頁, 雄山閣出版・東京。
- (44) 金子浩昌・忍沢成視, 1986 a, 『骨角器の研究』縄文篇Ⅰ, 184～186・192～194頁, 慶友社・東京。  
金子浩昌・忍沢成視, 1986 b, 『骨角器の研究』縄文篇Ⅱ, 慶友社・東京。
- (45) 猪狩みち子・大竹憲治・山崎京美ほか, 1988, 『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊, いわき。  
猪狩みち子, 1991, 「いわき地方における鹿角製斧状製品の編年的考察」『いわき市教育文化事業団研究紀要』第2号, 1～19頁, いわき。
- (46) 器種別内組成集計表・遺跡別組成表・各器種の出土数とその百分率において, 各表ごとで総数が異なり, 本文では石山貝塚で出土しているとかかれてはいるものの, 遺跡別組成表では出土数が記入されていない。そのため, 本文のような表記にしている。
- (47) 注(44)文献。
- (48) 麻生 優, 1960, 「第一貝塚の調査」『蜆塚遺跡 その第三次発掘調査』, 104～145頁, 浜松市教育委員会・浜松。
- (49) 長田 実, 1958, 「第三貝塚地域の発掘調査」『蜆塚遺跡 その第二次発掘調査』, 114～155頁, 浜松市教育委員会・浜松。
- (50) 注(5)文献。
- (51) 村田文夫, 1970, 「関東地方における縄文前期後半期の生産活動について」『古代文化』第22巻第4号, 75～88頁, 古代学協会・京都。  
梅沢太久夫, 1987, 「縄文時代前期における一つの画期」『埼玉の考古学』, 99～110頁, 柳田敏司先生

還暦記念論文集刊行委員会・大宮。

- (52) 渡辺 誠, 1975, 「縄文農耕論への新しい視角」『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』, 317～320頁, 舞鶴市教育委員会・舞鶴。
- (53) 渡辺 誠, 1981, 「縄文時代におけるブナ帯文化」『地理』第26巻第4号, 39～46頁, 古今書院・東京。
- (54) 山越 茂・上野修一ほか, 1981, 『篠山貝塚発掘調査報告書』, 栃木県教育委員会・宇都宮。  
井上 肇・田中和之ほか, 1990, 『さいたまの海』特別展展示図録, 埼玉県立博物館・大宮。
- (55) 中尾佐助, 1966, 『栽培植物と農耕の起源』, 59～66頁, 岩波書店・東京。
- (56) 注(42)文献。
- (57) 注(41)文献。
- (58) 橋口尚武, 1983, 「調理」『縄文文化の研究』第2巻, 63～76頁, 雄山閣出版・東京。  
橋口尚武, 1997, 「シュウデ・天南星・海亀・カツオドリ」『季刊ヴェスタ』29, 70～76頁, 味の素食の文化センター・東京。
- (59) 注(5)文献。
- (60) 前田保夫, 1980, 『縄文の海と森』, 蒼樹書房・東京。  
安田喜憲, 1980, 『環境考古学事始』, 日本放送出版協会・東京。

**追記** 脱稿後, 球根類が出土している山梨県内の遺跡をみおとしていたことに気がついたので, 補足しておきたい。追加すべき遺跡は都留市中溝遺跡と都留市中谷遺跡の2遺跡で, 中溝遺跡は早期末～前期初頭, 中谷遺跡は中期末に属する。文献は下記のとおりである。

長沢宏昌, 1997, 「炭化種子に着目した調査事例」『山梨県考古学協会誌』第9号, 37～42頁, 山梨県考古学協会・山梨県石和町。